
国語科教育における敬語指導の課題

－ 次期学習指導要領の「敬意と親しさ」を見据えて －

永 田 里 美

abstract

本稿は国語科の次期学習指導要領で新設された「敬意と親しさ」(「言葉の特徴や使い方に関する事項」という用語に着目し、現状の敬語および言葉遣いの指導に照らし合わせつつ、今後の敬語指導の方向性について考察を行ったものである。調査によれば、現行の教科書に反映された敬語の定義(=相手を高める)では現代社会に見られる敬語表現を説明しきれないこと、また言葉遣いに関する学生の意識調査では「改まり」に意識を払うものの「親しさ」に留意する者はいないこと、話すときの言葉遣いを学校で学んだと感じる学生は半数に満たないことがわかった。現段階では「改まり」や敬語使用の「正確さ」、書き言葉に関する言葉遣いに学習の比重が置かれていることから、学校教育の場において「敬意と親しさ」の学習に向かうためには、現代社会における敬語の定義を捉え直すとともに、対話を通し、生きた言葉のやり取りをつぶさに観察する機会を十分に設け、その運用のあり方について説明する能力を育成してゆくことが求められる。

キーワード

学習指導要領・敬語・言葉遣い・敬意・親しさ・定義・文法学習

0. はじめに

現在そして今後の知識基盤社会において未知の課題に対処するための手立ての一つに、他者との協働が挙げられている。他者との協働に不可欠なのがコミュニケーションであり、コミュニケーションの媒介に必要な言語能力の向上が教育の場において重要な課題となっている^(注1)。

国語科教育においては教科の本質(国語科における「見方・考え方」)を「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味付ける」こと、すなわち「言葉による見方・考え方」にある^(注2)とし、言葉に対するメタ認知的な力を培う点において、言語能力を形

成する中心的な教科としての役割を担っている。

この「言葉による見方・考え方」を培うために、次期学習指導要領では目標と内容とを掲げ、目標は3つの観点「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」から、内容は2本の柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」によって構成している。このうち「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方に関する事項」は言葉に対するメタ認知的能力に直接、関与するものであり言語能力を向上させる上で重要な位置を占めている。その中でも次期学習指導要領で新設された事項は、今、言語能力を培う上で何が求められているのかを明確に知る指標となるであろう。

そこで本稿では次期学習指導要領で新設された事項のうち「言葉の特徴や使い方に関する事項」の「敬意と親しさ」(高等学校必修科目『現代の国語』)に着目することとしたい。そして現状の敬語指導や言葉遣いについての調査報告を行った上で敬語指導、ひいてはコミュニケーション教育に関する課題と指導の方向性を考察する。

1. 「敬意と親しさ」の位置付け

「敬意と親しさ」を考察の対象とするにあたり、最初に次期学習指導要領での位置付けを確認しておきたい。

次期学習指導要領では各教科の見方・考え方を培うために、上述のとおり3つの観点による目標と2本の柱による内容が設定されている。本稿で取り上げる「敬意と親しさ」は内容における「知識及び技能」の指導事項の一つとなっている。この「知識及び技術」については単なる百科事典的な知識を指すものではないことが、次のように述べられている(下線部は稿者による。以下同様)。

〔知識及び技能〕については、個別的事実的な知識のみを指すものではなく、社会の中で生きて働く概念的な知識として習得されるものであることや、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、変化する状況や課題に応じて立体的に活用できる習熟した技能として習得されるものであることなど、広範な意味で用いられることに留意する必要がある。

(「国語ワーキンググループによる審議とりまとめ」平成28年、p.7)

本稿では、ここに示された記述内容について「社会の中で生きて働く」ということに留意しておきたい。この「知識及び技能」はさらに3事項(1)言葉の特徴や使い方に関する事項、(2)情報の使い方に関する事項、(3)我が国の言語文化に関する事項で構成されている。このうち「敬意と親しさ」は「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」の中に位置付けられており、高等学校の必修科目となる『現代の国語』において学習されるべき事項となっている。以下に「敬意と親しさ」について記された内容とその解説^(註3)の一部を抜粋する。

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

イ 話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うこと。

(3内容「知識及び技能」(1)言葉の特徴や使い方に関する事項)

【解説】(略) 正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮するとは、相手や状況に応じて最も適切な言い回しを選択するということである。

国語分科会報告も踏まえ、(中略) 敬意と親しさとは、伝え合う者同士が近付き過ぎず、遠ざかり過ぎず、互いに心地良い距離感に立って伝え合うことである。

(『高等学校学習指導要領解説』 p.74)

ここに示された「国語分科会報告」とは平成30年3月に文化審議会国語分科会により公示された『分かり合うための言語コミュニケーション(報告)』のことを指す。それによればこれからの時代のコミュニケーションに必要な要素として次の4つが挙げられている。

(1) 正確さ (2) 分かりやすさ (3) ふさわしさ (4) 敬意と親しさ (pp.16-21)

「敬意と親しさ」はこの4要素の1つであり、学習指導要領解説による定義は「国語分科会報告」で示されたものに基づいている。

このような言葉遣いに関する具体的な事項である「敬意と親しさ」の指導にあたり、次の3点をおさえておきたい。

- ① [知識及び技能] は社会の中で生きて働く概念的な知識として習得されるものである。
- ② 「敬意と親しさ」は言葉遣いに関する具体的な指導事項であり、相手との心理的な距離を適切に図るためのものである。
- ③ 「敬意と親しさ」は分かり合うための言語コミュニケーションの4要素の1つである。

以下はこの3点を見据えながら考察を進めたい。次の第2節では現行の学習指導要領と次期学習指導要領において「敬意と親しさ」に関連する語句がどのように配置されているのか、学習の系統(学校段階の接続)を遡りつつ両者の比較を行う。第3節では現行の教科書を対象とし、敬語学習がどのように教材化されているのかを示す。また第4節では「言葉遣い」について現在の大学生がどのような学習観を有しているのか、その意識調査の結果を示す。以上の調査結果を踏まえて第5節では次期学習指導要領における敬語指導の方向性について考察を行いたいと考える。

2. 「敬意」に関連する指導事項

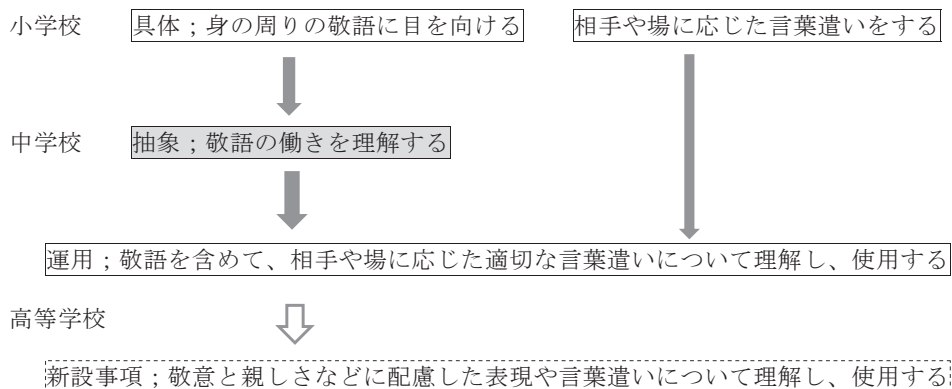
先に述べたように「敬意と親しさ」は次期学習指導要領における新設事項である。掲げられた文言「敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣い」のうち「親しさ」はむろん、「配慮した表現」、「敬意」という語もこれまでの学習指導要領で用いられてこなかったものである。そこで本節では「敬」に関する語句と「言葉遣い」に関する指導事項について現行の学習指導要領と次期学習指導要領との比較を行うこと(表1)によって敬語指導に関する流れを確認しておく。

「敬」に関する語句と「言葉遣い」に関連する指導事項を系統的にみると、現行の学習指導要領も次期学習指導要領においても次のような流れが読み取れる。すなわち小学校低学年から中学年のうちは「～です/ます」体(敬体)について理解する。これは児童が日常生活で話す言葉と教科書のような敬体を用いた言葉遣いとの違いに気付かせるということであろう。次に小学校高学年で身の周りの敬語を理解し、中学校第2学年で敬語の働きを理解する運びとなっている。ここにおいて敬語に対する理解を具体から抽象的段階へと深めることとなる。この課程を経て、中学校第3学年では適切に敬語を使う、つまり運

(表1)「敬意」と「言葉遣い」に関連する指導事項について

	現行学習指導要領 (H20/21 年告示)		次期学習指導要領 (H29/30 年告示)
	(1) 話すこと・聞くこと の能力を育てるため、次の事項について指導する。	〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕 イ 言葉の特徴やきまりに関する事項	〔知識及び技能〕 (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項
小学校第1学年及び第2学年		(キ) 敬体で書かれた文章に慣れること。	キ 丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて使うとともに、敬体で書かれた文章に慣れること。
小学校第3学年及び第4学年	イ 相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。	(エ) 文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。	キ 丁寧な言葉を使うとともに、敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。
小学校第5学年及び第6学年	ウ 目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。	(ク) 日常よく使われる敬語の使い方に慣れること。	キ 日常よく使われている敬語を理解し使い慣れること。
中学校第1学年	ウ 相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと。		
中学校第2学年	ウ 相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと。	(ア) 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きについて理解すること。	カ 敬語の働きについて理解し、話や文章の中で使うこと。
中学校第3学年	イ 場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬語を適切に使うこと。	(ア) 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いを理解するとともに、敬語を社会生活の中で適切に使うこと。	エ 敬語などの相手や場に応じた言葉遣いを理解し、適切に使うこと。
高等学校 (必修科目)	エ 話したり聞いたり話し合ったりしたことの内容や表現の仕方について自己評価や相互評価を行い、自分の話し方や言葉遣いに役立てるとともに、もの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。		イ 話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うこと。

用の技術を磨くことが指導事項とされている。なお現行学習指導要領では「話すこと・聞くこと」において相手や場に応じた言葉遣いへの指導が示されているが、次期学習指導要領では、後述するように全体的に「相手意識」への育成を図りつつ、中学校第3学年の敬語指導において、あらためて相手や場に応じた言葉遣いを指導するようになってきている。これらの学習課程の上に、次期学習指導要領では「敬意と親しさ」などの配慮した表現や言葉遣いを理解し、使用することへ繋ぐこととなる (以下に図示しておく)。



この流れのなかで敬語指導の要となるのは、中学校第2学年での「敬語の働きを理解する」こと（図示中、網掛け部分）であろう。ここでどのように敬語をメタ認知的に説明するかによってその後の運用の仕方も異なってくると思われる。次節では中学校第2学年および第3学年の現行教科書を分析することによって敬語指導に関する課題を浮き彫りにしたい。

3. 現行教科書における「敬語」指導の分析

本考察にあたり、調査を行った教科書は次の5社によるものである（表2）。いずれも平成31年度採用版である。参照ページを挙げておく（なお学校図書『中学校国語3』および光村図書『国語3』では独立した章節として敬語を取り上げていないため括弧を付す）。

（表2）調査対象とした教科書について

出版社	教科書名	参照ページ
学校図書	『中学校国語2』	pp.214-218
	『中学校国語3』	(p.289)
教育出版社	『中学国語2 伝え合う言葉』	p.133, pp.239-241
	『中学国語3 伝え合う言葉』	p.100, pp.234-235
三省堂	『現代の国語2』	pp.157-159
	『現代の国語3』	pp.140-141
東京書籍	『新しい国語2』	p.30, pp.256-257
	『新しい国語3』	p.30, pp.254-255
光村図書	『国語2』	pp.125-127
	『国語3』	(p.40)

最初に敬語の分類について述べる。5社において基本となる「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の分類は共通しているが、『中学国語2 伝え合う言葉』（教育出版社）と『現代の国語2』（三省堂）はそれらに加えて美化語を採用している。

次にそれぞれの語の定義（表3）をみてゆきたい。

(表3) 敬語の定義について

	尊敬語	謙讓語	丁寧語	美化語
学校図書	動作をする者を高める	動作を受ける者を高める	話し手が聞き手を高める	
教育出版社	動作などの主体である人物を高めて言う言葉	動作が向かう先などを高めて言う言葉	改まった場面などで相手に対して丁寧に述べる言葉	物事を、上品に美しく言う言葉
三省堂	動作・行為する人を高めた言い方	動作・行為の受け手に対してへりくだった言い方	聞き手に対して敬意を表す	上品に表現することば
東京書籍	ある人の動作やある人に関係のある人や物や事柄を高めることでその人に対する敬意を示す表現	自分や自分に近い動作や自分に関係のある人や物や事柄をへりくだって言う(書く)ことで相手に対する敬意を示す表現	話し方(書き方)を丁寧にすることで、聞き手(読み手)に対する敬意を示す表現	
光村図書	動作・行為する人に対して敬意を示す	動作・行為をする人に対して敬意を表す	話し手(書き手)から聞き手(読み手)に対して丁寧さを表す	

これらを概観すると、尊敬語、謙讓語については対象となる相手を「高める」(もしくは自分が「へりくだる」)という概念を用いた定義付けが多いことがわかる。3社(学校図書、教育出版社、三省堂)が「高める」を用いており、「高めて(へりくだって)敬意を示す」という定義が1社(東京書籍)、「敬意を示す」という定義が1社(光村図書)であった。丁寧語の定義は「高める」(学校図書)他、各社によって様々である。

今後の「敬意と親しさ」の学習に向けて敬語の体系を眺めた場合、最初の課題となるのは「高める」という定義ではないかと考える。これまでの敬語学習は古典文法の体系を視野に据えてきこともあり^(注4)、敬語を上下の概念で捉えておくことが後の古典学習をスムーズにさせていたと思われる。また現代語でも敬語が上下関係を示すものであることはある部分においては正しい。しかし敬語の実態に照らし合わせた場合、以下のような問題が生じ得ることは看過できない^(注5)。具体的には、(a)目上の人に対して必ずしも敬語が用いられるわけではなく(b)目下の者にも使用されること、さらには(c)同一人物の同一対話内において敬語を用いたり用いなかったりする例がみられることなどが挙げられる。

まず(a)に関して述べると、目上の人を対象であっても時間が経つにつれて敬語を用いなくなる例はしばしば観察されるであろう。また菊地(2008, p.12)では目の前に対象者がいない次のような例は許容される割合が高いことを指摘している。

(例1)(同僚の会話において)「部長はきのう相撲を見に行っただって」

これは現代の敬語使用が上下関係よりもその場の対人コミュニケーションを重視する傾向にあることを示している。

次に(b)目下の者に敬語が用いられる例としては、親(上位者)から子(下位者)に対して

(例2)「お母さんはもう知りませんよ。どこへでもいらっしゃい。」

(北原(2011)の例を改変)

というような言語事象がみられる。この場合の敬語は上下関係の転換を図ったものではなく、関係性はそのままに相手を突き放す効果がある。

さらに(c)に関して述べると、敬語は目上、目下にかかわらず初対面同士の対話で用いられやすく、その上、同一相手に対して対話中に敬語を用いたり、用いなかったりする「スピーチレベル・シフト」^(注6)という言語事象が存在する。以下のような例がそれに該当する。この会話では、就職先の銀行について初対面であるA（理工系学部4年生女性）とB（人文系学部4年生女性）が敬語を使ったり（実線部）、使わなかったり（波線部）している。

(例3)

A「でも中に入ると結局何やっているんでしょう」

B「うん」

A「コンピューターとかやってるのかもしれない」

B「あそっか、ふーん」

A「なんか、あの、ダイレクトメール来るじゃないですか」

B「あーはい、はい」

A「もう銀行ばかりなんですよ」

B「あ、そうなんです？」

(引用は三牧 (2013、p.119) による)

このようなとき話し手は相手を「高める」のを止めたとはいえない。(a)、(b)、(c)の事例における敬語は『分かり合うためのコミュニケーション』(p.21)に従えば次のように説明がなされる。

- ・過剰な敬語の使用は、相手との距離を遠ざける可能性がある
- ・『です・ます』などの丁寧語も相手との距離を作る場合がある
- ・くだけた言葉や言葉遣いに互いの距離を近づける効果がある

いずれも「高める」(へりくだる)という概念ではなく「距離」で説明され得るものである^(注7)。

この「距離」に関して、今回調査した教科書では『新しい国語2』(東京書籍)と『現代の国語3』(三省堂)に次のような記述がみられたのみであった。

敬語を使うときには「誰の」動作・事柄なのかを常に意識する。自分から遠い関係であったり、相手との心理的な隔たりが大きかったりするほど、敬意を強めるのが普通である。(『新しい国語2』東京書籍、p.257)

敬語の使用には、「距離感」が関係しています。敬語は「尊重している」という気持ちを伝えたい時に有効な方法ですが、一方で、かえって「疎遠な感じ」を与えることがあります。(『現代の国語3』三省堂、p.141)

ただし、大方の教科書において、敬語の事象を捉える事例に乏しいのが現状である。大きくは尊敬語と謙譲語の誤用を正したり、敬語に言い換えたりするというように、文法的正しさを問う場が設けられているに過ぎない^(注8)。以下の表4は中学校第3学年の教科書における敬語の取扱いをまとめたものである。およそ中学校第2学年で理解した文法事項を確認する内容となっており、敬語の運用について考察する機会が十分に与えられているとは言い難い。

(表4) 中学校第3学年における敬語の取扱について

	敬語の取扱い
学校図書	独立した章節はない。資料編に敬語法のまとめを記載している。
教育出版	目上の人を対象にした敬語の使い方を練習する。敬語の史的变化に言及。
三省堂	敬語の使用における「距離感」、気配りなど敬意表現の諸側面に言及。
東京書籍	間違えやすい敬語について練習問題を挙げる。敬意の度合いについて言及。
光村図書	独立した章節はない。スピーチの節で「相手に会った言葉遣い（敬語など）」として触れる。

先に掲げた表1のとおり、義務教育期間における敬語学習の流れは現行の学習指導要領と次期学習指導要領ともに基本的には変わらないが、次期学習指導要領では中学校第3学年における敬語の指導事項に「相手の場面に応じて適切に使い分ける」という文言が付されていることは注意しておきたい。その際、「適切」をどのように捉えるか、何をもって適切とするかは慎重にならねばならないであろう^(注9)。次期学習指導要領の「敬意と親しさ」を系統的な学習上に見据えるならば、適切さとは、改まりだけではなく適度なくだけ方に対する言葉遣いも組み込まれるはずである。

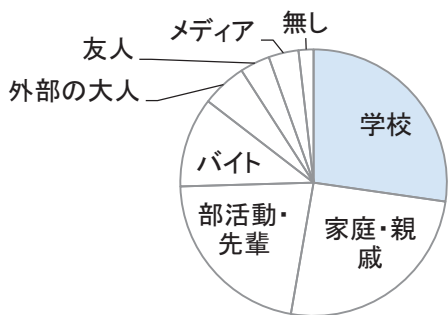
このように現行の教材で多分に使用されている「高める」(へりくだる)という敬語の定義のままでは「敬意と親しさ」への学習につながりにくいというだけでなく、現代社会における敬語の言語事実を捉えきれないという課題を有している。文法学習における敬語の定義の見直しが促されるとともに、敬語の運用に対して日常生活や社会生活における生きた言語の観察を行うという十分な学習の機会が求められているといえよう^(注10)。

4. 「言葉遣い」に関する意識調査

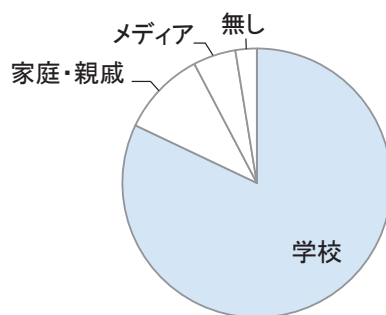
第1節で確認したように「敬意と親しさ」は言葉遣いに関する具体的な指導事項である。本節では「言葉遣い」に対する意識調査として本学の学生を対象として行ったアンケートの結果を示したい。アンケートの実施内容は以下の通りである。

- ・実施日；平成30年10月10日（水）
 - ・アンケート対象者；本学教育学部国語科コースに在籍する1年次（10名；男子4名、女子6名）、2年次（23名；男子11名、女子12名）合計33名。
 - ・アンケート目的と内容
 - 目的；国語教育における「言葉遣い」の意識調査を行うもので学術目的に使用する。
 - 内容；以下の1、2ともに各100字程度の自由記述、回答時間は15分程度。
- 1、「言葉遣い」に配慮するように促された時、あなたはそれぞれの場面でのどのようなことに留意しますか。
 - 1-①話すときの「言葉遣い」で留意すること
 - 1-②書くときの「言葉遣い」で留意すること
 - 2、上記のことがらはそれぞれどのような場で学び／教えられてきましたか。
 - 2-①話すときの「言葉遣い」
 - 2-②書くときの「言葉遣い」
- 以上を本学クラウドシステムのLMS上で回答、授業者に送信されたものを回収した。

次にアンケート内容2についてみてゆく。「言葉遣い」についてどこで学んだのかという問いに対して、「話すとき」の学習について学校と答えた学生は半数以下であり、家庭、部活動、アルバイト（社会）とほぼ並んでいる（学校15、家庭・親戚14、部活動・先輩12、バイト6、外部の大人3、友人2、メディア2、無し1）。一方、「書くとき」については学校が大半を占める（学校32、家庭・親戚4、メディア2、無し1）という結果が得られた。それぞれをグラフ（図3、図4）で示す。



(図3) 話すときの言葉遣いを学んだ場



(図4) 書くときの言葉遣いを学んだ場

全体を通して窺えるのは、学生にとって「言葉遣い」に留意するとは改まりや文法的な正しさに気を払うことであり、「親しさ」への意識化は見られないということである。これらは『分かり合うためのコミュニケーション（報告）』に挙げられた4要素

(1) 正確さ (2) 分かりやすさ (3) ふさわしさ (4) 敬意と親しさ (pp.16-21)

のうち、(1)(2)に重点が置かれてきたと言い換えることができ、(3)のふさわしさについては改まりに偏っているといえる。また、話すときの「言葉遣い」については学校で教えられたという覚えが希薄であるということも着目される。

宮原（2011）が指摘するように、従来、「日本社会ではコミュニケーション能力は改めて教育や訓練をして習得するものではなく、年齢と経験を重ね、社会のさまざまな場面での人間関係を通して、少しずつ身につけるもの、と考えられてきた（p.19）」節があることは否めない。話す際の「言葉遣い」を家庭や社会で学んだと学生が感じるの、そうした社会の風潮を反映しているともいえる。アンケートの中には「言葉遣い」を学んだ、あるいは教えられた場について「特に無し」と答えた学生が1名いたほか、次のような回答も見られたのはその一端を示すであろう。

・（※話すときの）言葉遣いについて指導を受けたわけではないが、実践の中で身についた。高校生の頃、接客のアルバイトをしていたのでそれによって自然と身についてきた。（2年男子、※は稿者が補った）

しかし、人間関係を取り巻く環境が大きく変化した現代社会にあって、人はこれまでにないコミュニケーションの環境に置かれている。とりわけコミュニケーションに関わる機器類が発達したことによって、相手の状況が目に見えにくい人と人との関係においては臨機応変の柔軟な対応も難しくなっている。時に、意図せぬ亀裂、事故、場合によっては死に至るようなミスコミュニケーションが生じている。

こうした環境を視野に据えて、我々は「敬意と親しさ」を含め、人と人とのコミュニ

ケーションについて書くときや改まった場での「言葉遣い」のみならず、日常生活における話すときの「言葉遣い」においても意識化し、やり取りされる言葉をメタ認識してゆくような指導の方向性をあらためて見直す必要がある(注11)。

5. おわりに—今後の敬語指導の方向性—

以上、本稿では国語科の次期学習指導要領における新設事項「敬意と親しさ」に着目し、今後の敬語指導についてその方向性を考察してきた。あらためてまとめ直すと次のようになる。

- ・ 現行の教科書における敬語の定義と次期学習指導要領に示された「敬意」の定義「相手との心的な距離」とのつながりが希薄である。現代語における敬語のあり方を捉え直すとともに、教育の場において生きた言語観察を踏まえた言語のメタ認知化への取り組みが必要である。
- ・ 学生の意識として、話す際の「言葉遣い」を学校で学習したという感覚が浅い。学校という場で「書くこと」だけではなく「話す・聞く」の指導に力を注いでゆく必要がある。
- ・ 学生の意識として「言葉遣い」に対する学習経験は「正しさ」「的確さ」「改まり」に偏っている。次期学習指導要領を見据えて「適切さ」の中には「親しさ」を表す「言葉遣い」が存在することへの意識化が必要である。

「国語ワーキンググループにおける審議取りまとめ」(平成28年)では「言葉を取り巻く環境の変化を踏まえた学習の充実」として「相手意識」への重要性を挙げている(p.14)。永田(2017)は相手意識の中でも「書くこと」について、次期学習指導要領が個性を重んじつつ、多様な読み手を意識した書き手の育成へと指導事項を積み上げていることに言及している。この「相手意識」は本稿で取り上げた〔知識及び技能〕「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」においても鍵となっている。本稿ではそのうちの新規事項である「敬意と親しさ」を取り上げ敬語指導のあり方を論じてきたが、同じ〔知識及び技能〕の領域においては次のような新設項目があることも注意が促される。

- ・ 「言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと」
(小学校第5学年及び第6学年)

・ 「言葉には、相手の行動を促す働きがあることに気付くこと」 (中学校第2学年)
これらはいずれも相手を配慮する表現内容として「敬意と親しさ」を見据えつつ系統的に学んでゆく必要があるものである。

次期学習指導要領を見据えたとき〔知識及び技能〕とは事実を知識として得るものではなく「社会の中で生きて働く概念的な知識として習得される」という位置づけにある。本稿で取り上げた敬語の様相を含め「相手意識」を言語化あるいはメタ認知化してゆくには、教科書に書かれた文法規則を覚える学習や正しさや改まりへの「修正」学習にとどまるのではなく、日常生活や社会生活から生きた言語を観察し記述してゆく文法学習の機会を十分に設けたい。それが社会の中で生きて働く言語能力の向上、ひいてはコミュニケーション

ン能力の育成につながると考える。

この「相手意識」という点においては、外国語科におけるコミュニケーション手段や特別の教科道徳などとの関連をはかり、複合的な視点から言語を分析してゆくことも言語能力の育成に有効であると思われる。それらの連携については稿を改めたい。

【注】

- 1) 全国学力・学習状況調査によれば言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られていることがわかるものの、依然として教材への依存度が高いとの指摘もあり、更なる授業改善が求められる（平成28年12月中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について」p.124）。言語活動のさらなる充実、次期学習指導要領（平成29年小学校、中学校告示、平成30年高等学校告示）においても求められている。
- 2) 同上（平成28年12月中央教育審議会答申）p.126。
- 3) 『高等学校学習指導要領解説』 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/1384661.htm（2018年11月1日確認）
- 4) 矢澤（2005）によれば「中学校の国文法は口語文法から始め、之を基礎として文語や古文の文法に進む（橋本進吉『改正新聞店初年級用』1937年）」とあるように文語文法の導入という役割を担っていた口語文法のあり方は戦後も続いた（p.115）。実用的な文語文法を習得するために口語文法を学習していた戦前の動機づけが失われた今、学校教育の中における現代語文法のあり方自体を問い直す動きもある。須田（2017）などはその一例である。
- 5) 「敬意」についても、辞書的な意味では「尊敬する気持ち」（『明鏡国語辞典（第二版、大修館書店）』）と記されており「高める」と同様である。『敬語の指針』では「敬意」について「敬語は敬意に基づき選択される言葉であるが、敬意は必ずしも尊敬の気持ちだけではない。（p.34）」という注釈が施されており、注意を要する。
- 6) 三牧（2013）では同一の相手に対して、人間関係そのものが時間経過とともに変化することを「基本的スピーチレベルの変容」とする。同一相手に対する基本的スピーチレベルはその都度、大きく変化するものではないにもかかわらず、同一談話中での一時的なスピーチレベルの変化することを「スピーチレベル・シフト」と称している（p.88）。
- 7) こうした敬語の本質を「距離」で捉える見方は滝浦（2008）や北原（2011）においてもなされている。北原（2011）は距離の置き方は上位方向と水平方向があると指摘する。部下が上司に使うような、上位の方向に距離を置くことが、従来の相手を高める敬語であり、家族やウチの関係など水平方向に距離をおいた場合、突き放す効果があると述べる。
- 8) 原田（2017）においてもこの問題が指摘されている。
- 9) 永田（2017）ではグライスの協調理論を踏まえ、コミュニケーションには文法的な正しさだけでなく、運用面における適切さを考慮する必要性を述べている。
- 10) 菊地（2003）では、敬語の捉え方として(I)社会言語学的な側面；＜適用＞の問題と(II)文法的な側面；＜語形＞と＜機能＞の2つに分ける見方を示している。この分け方に従えば、従前の教育の現場では（II）の学習に偏りがあったといえる。
- 11) 松崎（2018）では主述不照応に対する児童の認識として、話し言葉の感覚が反映されていることを指摘し、文法的な不具合を取り上げるにしても、不具合の箇所や修正の方法を確認して練習問題を行うだけではなく、話し言葉と書き言葉の文法の違いに気付かせることが重要であると述べる。稿者も「書き言葉」の文体を意識化するためにも、対照となる「話し言葉」へのメタ認知化が必要であると考えられる。

【参考文献】

- 蒲谷宏（2013）『待遇コミュニケーション論』大修館書店
菊地康人（2003）「敬語使用に関する社会的・心理学的諸要因」（北原保雄監修、菊地康人編著『朝倉日本語講座8 敬語』朝倉書店）
菊地康人（2008）「敬語の現在—敬語史の流れの中で、社会の変化の中で」『文学』9-10 岩波書店

- 北原保雄 (2011)『日本語の常識アラカルト』文藝春秋
- 須田淳一 (2017)『国語文法第二 英語と互換性のある日本語文法をめざして』デザインエッグ
- 滝浦真人 (2008)『ポライトネス入門』研究社
- 永田里美 (2014)「言葉を知り、言葉を見つめ、言葉を使いこなす国語科教育とは」『教育PRO』43-17号
ERP
- 永田里美 (2017)「情報化社会のなかで『書くこと』—多様な読み手を意識した文章表現力の育成へ—」
『教育PRO』47-20号 ERP
- 原田大樹 (2017)「小学校・中学校国語科における敬語指導教材；教材における『敬意』を中心に」『福岡
女学院大学紀要・人間関係学部編』18 福岡女学院大学
- 樋口耕一 (2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシ
ヤ出版
- 松崎史周 (2018)「『書き言葉の文体』を意識化する文法指導」『全国大学国語教育学会国語科教育研究 第
135回東京ウオーターフロント大会研究発表要旨集』全国大学国語教育学会
- 宮原哲 (2011)「コミュニケーション研究と教育—現状と課題—」『日本語学』30-1 明治書院
- 三牧陽子 (2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版
- 森山由紀子 (2010)「現代日本語の敬語の機能とポライトネス—『上下』の素材敬語と『距離』の聞き手
敬語—」『同志社女子大学日本語日本文学』22 同志社女子大学日本語日本文学会
- 矢澤真人 (2005)「新しい教科教育文法」『日本語教科教育文法の改善に関する基礎的研究 日本の文法教
育Ⅲ』平成14~16年度科研費基盤研究(c)(1)研究成果報告書